

## 『乾坤』の発刊について

雑誌『乾坤』を発刊します。この企ては昨年九月の政治集団(叛旗)との訣別を大きな契機としています。というのは訣別はただちに私(たち)にとって表現の場の喪失を意味し、何らかの表現の場の創出の欲求を促したからです。政治集団(叛旗)との訣別が表現の場の喪失であったということは私(たち)には二重の意味をもつものでした。その一つは言語・行動・組織表現の総体にわたり、自己表現の直接的な場の喪失を意味したということです。政治運動を中心に歩んできた私(たち)にとって、直接的な表現の手段(媒介)を喪ったということの意味しました。もう一つは、政治集団(叛旗)の創出と展開のなかに政治的運動の共同的表现と存在の意味あいを含めてきたわけですが、そこからの訣別が政治的運動や共同的存在の可能性と現在性について、全く別の方法を考えることを意味したということです。政治的運動や共同的存在について、レーニンの党的構想と党的集団編成の止揚を内包して闘うという企てが、全く別の方法なしに不可能であるということ突きつけられたということです。私(たち)の内在的な過程に訪れたこの実感は単に主観的なものでなく、ある基盤を映し出しているに違いありません。共同性の問題やその展開(政治的運動)の可能性を考える場合、「党」的構想や場よりも、この基盤と欲求の中に賭けるべきであるという判断を下したことを意味したと言っても間違いではありません。

政治集団(叛旗)との訣別のあと、新たな表現の場の創出が切実なものとしてやってきたとき、当然にもそれは言語・行動・組織表現の総体の問題として訪れました。このことは新たな組織論と組織的実践の欲求というように言ってもよいと思います。「党」的構想や場の止揚を内包した運動論や組織論の創出という六〇年以降の課題はますます切実なものとなっています。それは組織論を根柢で規定する観念や規範(自己抽象化と関係づけ)の共同性や共同体的存在が解体と拡散に入ることによって新たなイメージを促がされることとして現われています。現実的には法的な自由国家や社会主義的な国家に表象される共同の規範や概念、また共同体の像が対他性を喪失していく事態として存在しています。このことは共同性や共同体とは何か、という問を促すものと言ってもよいでしょう。共同体的なもの、また共同存在のなもの(国家・政治集団・組合等々)として表象されるものの本質を規定する共同の幻想性が、対他性を喪失していくという時代的過程にそのことは鋭く立ち現われています。共同性、また共同体とは何かという課題は現在の視るかぎり、思想のなかにしか見出せません。もちろん、共同性とか共同体というのとは種々のユートピア的な共同体のことではなく、共同体や国家を無化し死滅に追い込む思想と感性の共同性という意味あいにはかなりません。人間の対象についての自覚的な行動としての思想や感性が共同体や国家に見出されるのではなく、そこから自立していくものとしてあり、その基盤が国家の外部にある大衆の根源的な生活過程にあることは言うまでもありません。現実の諸共同性と国家は幻想の自然過程の現在と自己意識としての社会意識の現存に存在します。言いかえれば国家的な共同意識と大衆の自己意識としての社会意識は相互規定的であり、私(たち)は生活過程における国家の外に感性や意識と所与の自己意識としての社会意識の分裂と対峙のなかに、一つの可能性を視ています。このことは思想の共同性において国家や共同体的なものから超出していくとする存在と照応するものと考えています。だから共同体や共同性の問題を国家の外部にある自己意識が所与の社会的意識と衝突してとりだされていく生活過程での自立的な行動と、それらを自己思想の共同性に繰り込んだ知的存在ということになります。私(たち)が賭けるべき基盤と欲求は、こういったものの現実的存在ということにほかなりません。レーニンの「党」的構想や「党」的集団編成の根柢にある共同のイメージや共同体の像は、こういったところからの転倒を迫られるであろうし、そのことはますますはっきりしていくと思われまします。現実の国家や共同体が自由国家から社会主義的国家に至る膨大な幻想空間を構成し、いわゆるレーニンの構想も自由国家へ自己修正した構造改革と、アジア的な農本思想の間に分岐しながら多様な幻想空間を構成しています。と同時に大衆の自己意識としての社会意識も同様に膨大な分岐のなかで幻想空間を構成しています。国家や大衆意識のうちのどれかを選択するということに見出される党派の思想と存在は、その華々しい対立にもかかわらず平準化と相互変容に向うものと思われまします。私(たち)が賭けるべき基盤や欲求の現実存在というとき、それは生活の現存的な過程によって孤立しているものとして、また知的過程の内在的膨化のうちに孤立しながら存在しています。生活的存在のなかで人々が膨大な社会的諸意識に覆われながら、それらが対立する意識を激成させ、孤立感の様相のなかで自己に向ってのみ膨らまします。解放感とは現実的に孤立していたとしても連帯を遂げているのであり、共同性を獲得しているのだと思われまします。同様に知的過程での諸共同性や共同的諸意識からの孤立と内在化する表出性の拡大は疑いもなく共同性を獲得して

いるのだと思われます。この視えない共同の契機に指示的なものが見出されるには情勢的な欠落が存在するのだらうと思われます。私（たち）が拠って立つべき基盤は存在します。たしかに私（たち）は以前からこういった現実には賭けようとしてきたのだと言えますが、そのことをあらためて確認し、自己の基盤に向けて進もうと思ひます。

新たな組織や運動という場合、当然にも、こういった思想や行動にどういった現実的表象を与え、場を構成するかが問題となります。私（たち）は政治運動に根拠を置いてきましたし、その帯域に踏みとどまり、闘いを持続しようとすることは疑いありません。ただ、その場合、言語の共同的表象の帯域での闘いを為そうとすることによって、レーニンの共同性のイメージに準拠づけられた政治の像や場の概念とは明瞭に異なっています。私（たち）は政治という概念を流通する政治概念と別に想定しているように、場の概念もまたそうにはなりません。私（たち）は政治の本質を共同の幻想と捉えますが、それは場の構成の本質を言語ということに見出すことでもありません。規範や概念としての法的構造は言語を基底にしています。そして、この言語の表象は言葉や物的機構や集団として表象され現象するものだと思っています。私たちが共同帯域での運動体や表現者として現われる場合、言葉や物的機構や集団として自己表象せざるをえません。つまり、制度や権力として自己表象するというわけです。だから一般に体制とか反体制とか権力とか反権力とかいうイデオロギー的表象をもたらすものですが、このことにはそれほど意味が与えられません。そこにおいて問題なのは普遍性ということであり、真の反権力は法的な規範や構造と対峙する沈黙の言語的プロセスに存在するものだからです。共同体が国家として表象される場合制度的に対応するのは、知識人の集団であり、資本家集団や「労働者集団」にはなりません。それはまた大衆の自己意識の言語的な表象です。これらが、あるところで政治的集団と社会的集団というように表象されるのは、国家が政治的・社会的国家的錯合体として存在するからです。私（たち）はどのような形態であれ、「知識人」の集団を政治的・社会的集団と呼んでよいと考えています。もちろん、ここで言う「知識人」は自己の日常性から少しでも離脱した労働者・大衆をも意味するわけで、極めて広範なものです。この政治的な表象が言語行為で表象されようと、行動で表象されようと、どのような組織形態で表象されようと、その区分は相対的なものだと思います。どのような存在様式をとろうと、重要なのは沈黙の言語的プロセスを有意義性として繰り込み、その意味で本質的に開かれているかどうかだけだと思います。私（たち）は自己のこういった現実性が種々の知的集団や存在と対立することを必至と考えています。もちろん、それは自己の歴史的な現存性ととの対立であり、自己自体との対立の現実的表象としてもです。私（たち）が『乾坤』に与えるイメージは、こういった政治的表象と場の形成を言語的行為の位相に中心を置きながら為そうとするものです。言語的行為としての政治的表象（行動集団等々）が様々の形で現われる可能性については、不可避であればその位相と条件を厳密に規定しながら展開するつもりです。『乾坤』が単なる個人雑誌に視られようと、非政治的なものとして視られようと自由であるが、政治的という概念が流通する概念と違うわけだから、そういった諸批判は問題外としてあります。私（たち）は『乾坤』の持続と展開がそのなかに込めようとしている私（たち）の意図をいつの日か自ずと表象させることを期待しています。

『乾坤』の具体的な性格については、現在最低限の事柄しか明らかにできませんが、今後の展開のなかで付加することがあれば、付け加えていくつもりです。

(1) 『乾坤』の中心軸として直接予約購読制を採りたいと考えています。

(2) 『乾坤』の発行所は乾坤社とします。『乾坤』への関わりは切実さということを準拠としますが、その責任は以下の二名が負うものとします。

編集責任 三 上 治

発行責任 黒 井 彰 義

(3) 乾坤社の連絡先は当面以下のとおりとします。

154 東京都世田谷区世田谷一四一十四 味岡方

乾坤社

(4) 隔月刊を目標にしていく予定。

直接購読予約申し込み方法は現金書留か当面次の口座に振込むかして下さい。

郵便振替 東京517933 三上 治

富士銀行 新宿支店 2401935874 三上 治

一号分の定価は六〇〇円で、送料一二〇円。三号分予約については二一〇〇円（送料込み）。なお可能な限り、値段については下げるべく努力をするつもりです。